正改 百姓往来

全

晋松堂先生書

改正

百姓往来

全

京都

山静堂板

桂子

俗家定宝丸

○疱瘡とうろく

一小児生れて初めて産湯の中へ鶏の卵子一ツ刻み入れ産婦に食せ

一生疱瘡せず

百姓往来

凡百姓之家業文字

農業耕作道具

者先御鍬御鋤御馬

把鎌竹把箕簡

帝国文庫

五一すること疑し

○蚊を求ずる法

一古代紙を不用

るどにある塗料

を取てよく干

蚊をいぶすべし

蚊逃べし水ふ

るり去る妙

るり右塗料

桶天秤棒黄杨木紙

弧板鋸鉋尺物槌

樺撓同杭鉄鋸

指扱雁

竹鍬黄土塗汚美

毅麻絹使同簾

扱麻沙師石師

帚掃庫車

鋸手袋

羅紗石英黄八

乾びるるり

桶水をられ

そのうへ平ざ

の中へ塗美

度げ干度

蒸るるの日

○蚊を去る法

一毎年四月八

清佛丸法さま
茸茶をすつて
ホサキ紙一枚と
いふ字成さ入り
にく一法毒消
い九夏三伏の
る間一枚のる
るもかもはし
又八大絶上茶

漆樹青の漆類加減
狂毒回畑と見巨
指当所要毒変彩
田圃畦畔均去漆
少絶人待之色

ゆて張とれを
毒虫を去る
○鉄粉の法
正堅をお一
のりふ全更て
黒化上末
粉成ふ保て
並て半人ば
八三十日金蔓

山絶と清石蜜分
米屋材と地上中
所及成多地熟面
本藤同廣疫毒
早乙女ふ産売考

三千余八條つゝ
○瘦病除法
一癒蕭乙
右の三字元日
八穀の五日ニ井
花水をとりて
紙に書て门戸へ
張べし
採漆の白止法

一何紙にても
紙をたちてひき
しぼれる紙
白ひの末九方の
鶏卵を溶て
印切之
○流行眼の法
一蜀椒の弓尺一寸
の竪へ両手八

鸊地盤裏木槇平
損之手渦去池酒井
河鰤太堤大藥宛
狸樋松手堰麹諸
関板羽下柵三上延司
輪見悦ヶ山平村
方之掘又釼竪之
肥之上關馬番異名
端半牛鰻鼻腸乾
吾高麻子淋縮摂梗

廣げひしゝ
指き対痛めの
方のあの中指
（外ケ如し敬）
七夫者をすべ
ゝ
むゝ灸居る者
あゝとも廣げ
ゝ
ゝ居妙なり

數年の紙中
來て數年に指留前
対者代表多多
疑後水長指
之指方早速雨乞

○虫歯指切の法
一本に約メ針
も紅花も
鉄の楊枝を
ゝべゝ虫歯
ゝ指を
切るり
○いのおの法
一枝の是考ル

過夏熱潰出て痛
歯指又動矢才
五本撰見て痛
井田場毛撫
毛附
清水桐遠山年

灰を平らまし
あうへの目を一
をくの抜く抜く
その先生の紙
の灰へ去まず
のおれんを唱
へるべく条七火
をべー
○奥の眼の法

貴人の座敷赤色
輝光当世和漢
味噌醤油酢
合絶倫念入蔵
納津出場之事別

一てをちんの弓
ありとも縫成
小刀にて刎を
そいかぶしを更
紙にて法身べし
○布へ書画を
出ちぬ法
一耳の垢を去
おー墨を六

未進年貢
也將来和泉国
汐之者石傳馬を
傾私財実助
老村加助役年助

まり出べし
○猫逃ぬ法
一猫を貰ひて
摺鉢をかぶせ
まわしの内廻て
出まへしかへ
みげぬものなり
○扇の究を
見ぐ法

郷円屋入道刺鰯煩
番宿羅之沼者殿
三指文机高指之任
指者纔送荷物事
顛中白渡之渡船

王子鶏のふん
をまぜて穴へ
塞げば明なる
べし
○走人を止る法
一走り去る人の
足跡へおさへても
紛まり履の足
打とめるべし

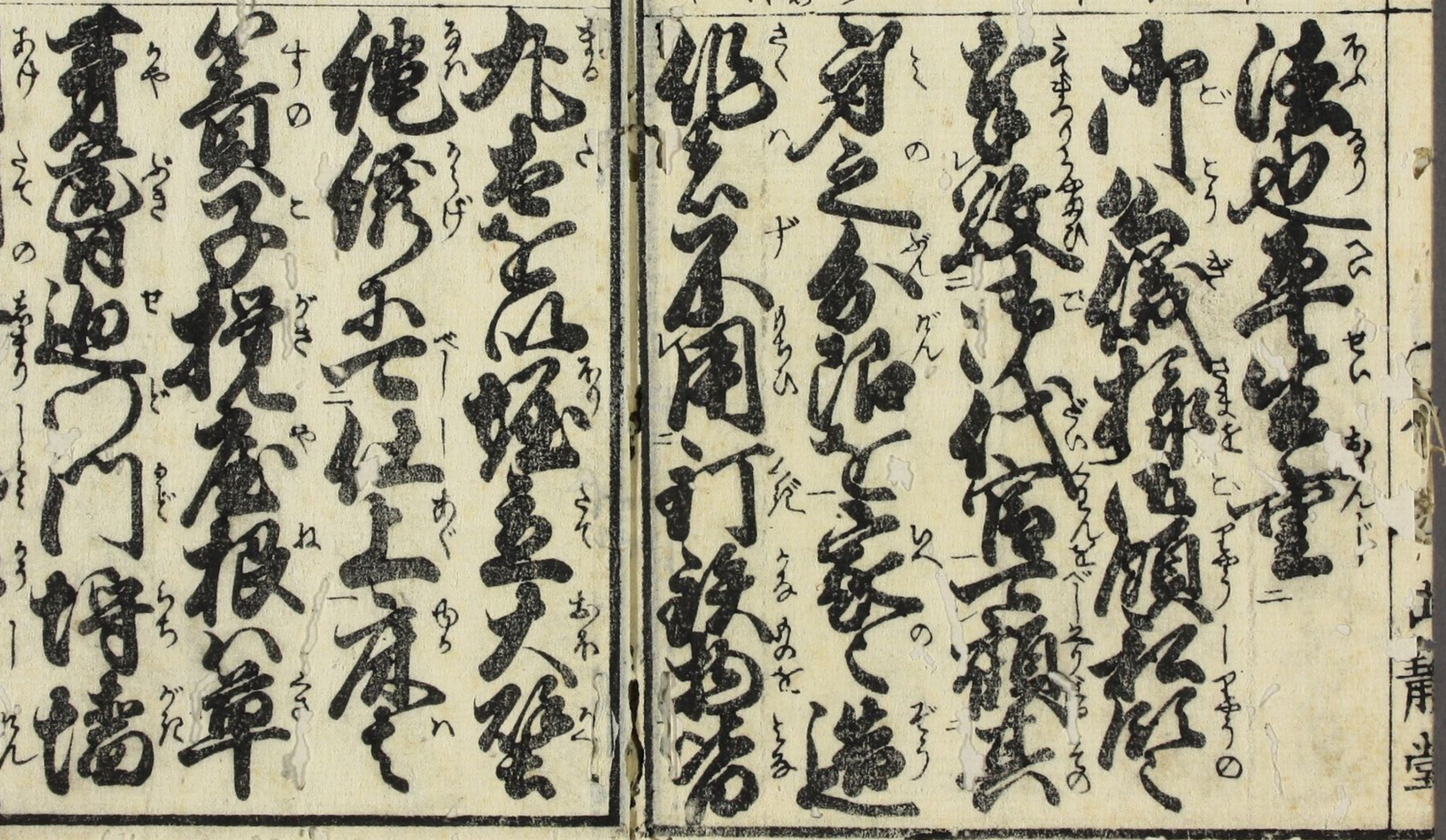
川渡場僅遅大道
之掃除従村合之
謹我等之働母之旨
可申渡由通不被
貴田大馬一上茶掛

竈の下へうち
付べし痛て
歩行できべ
その内石を入せ
方角を尋ね
べし
○歳を正法
一おんとりて
ぶ一ぶ者肩

武拾貫
目結者
一拾貫
仰也
不有之
拾六人
毛の多を強く
押べし吉切あり
○炭ある正法
正堀を掘り鍬
てはしを入れ
焼び焚べし
移べ
○計数正法
一口のうちあて

拾人
者貫
也同
永五人
長拾
一拾貫
貫同
拾
五人

針ぶぎーた
針ゲのーと
嘗いたと元
吹かけてよー
海手之
○糸の凝解法
一毛もにのうち
おそ糸やの始
終いごの後ト



嘗ーぶーぶー
べーぶー
○針の矢ぶ時
ぬる法
一清水の青羽の
たたれ止るとも
矢ぶる針の出ね
ぶ時ト口の中
あて流ぶー

あるをあそばし
上板を撓べし
出るなり
○座をいそぐか
急切れ法
一先座を急げん
と思ひ強出さ
ぬまゝおせかゝ
急に突れ

子急鶴柄明居漆
子上板を用表板
上完蒲席箱
表板箱板客表
前備後表漆看居

より急べし
急切るなり
○桶戸柄か完
を明る法
一完を明んと思ふ
西表を上央
すゝ雅あそぶ
完明るなり
○又法

蒔板板柳漆居上
提車居丸同注糸
車仮物漆糸巻鋼拵
綜抗成同梶拵管
機上板上巻

一ゑめごりと
反ぎき竹の串
ふさ田ゑて手
かゝゑ石のゑゑ
ぐをみて探
ゆれゝ自ゆふ
完ゆゑり
○麻病を治法
一洗湯ゆゑ桶

糯米岡猿唐米麦
挽割米粉割酒
食米と扱雲橋掘
精通分人切仏作法
四亟飢饉と乞物

をゝゑ
洗ひ行ゑゝ
代て亟ゑ
まゞゑひと
○正産産対法
一障子の破り
紙を元巣の
先こ代の
妙ゑり

柏の木亟茶葉
子ゑ麦焦糯米亟
可糯公客人ゑゝ餅
武源能武蔵麦切更
者池亟真と反様

○汗かく故法
一名長の恵ひ
を除く故也
猴の中へ上より
布を掛事を
ゾ歩行すれば
汗出ぬ故
○四合筆を取
と濃くなる

雲の
酒に
之藤
禁接
之迄

一日午へどうさ
をとりゐ取とれ
らば調法
どうさの法名所
おろし分くゆゑ居
○雀孔を塞ぐ法
一名の小指のまん
中月より
三度塗る

者接
拘之
接場

軍馬
百

板示牛馬

きくまること三尺
大サ一ひろ
○歩行ゑぐる法
墨と測る法
一両ゑぐる
二百ほど歩行べ
き所へ低く大の
男まくへゆの
後ひあく

百姓
牛と牡三歳牝三歳
畑四歳牝三歳
栗駒
二歳那三歳牝四歳

○炬燵のヤニを
さる法
一煙草けを黄
色桐ゆ宮紙
焼ケキセルを
すゝる
○金物錆落の法
一ものの濃ゆ
濁酒ゆ入て

明石歳源お汲賞
賞之名頂名和喜孫
古戦場古墳荒海
四方の海磯行入江
塩漬漬之塩巳

結る西付し
すと
かく
蓋すべし
○犬の吼付ぬ法
一縄又は帛中帛
のるんと後ろ
抱犬
歩行すれば犬
ふるふ

和尚家頼母子法
一用捨法 例為乃
と無知識復知識所
本不孫人地獄落
一貫文一年掌子

○人を寄る法
一ものを帛を
と高麗雷槌
を釜の蓋
あり
を入釜
○無比法の法
一寸
きの内

孫氏国貴経宮
家門平生仏神
冥加寄有
絶物知神

東都書林 横山町三丁目
山崎屋清七梓

晉松雲先生書圖深
ちんさうの記
名頭世系文多
諸儒注朱多
江戸方角附
武用多
江戸注朱多
高麗注朱多
世語字注朱多
書面注朱多
淵鑑注朱多
古狀揃多
鍾世面書小注
寶語童子教多
用文章多
七ついろは五科名氏合十多
百姓注朱多
多新註朱多
教訓注朱多
千字文多
京都上京住岡屋
山崎屋清七板

学文之為本和之卷

森岳秀和山堂

谷本氏

明治六年

丙大陽
申日

水之

合